『虞美人草』女学三景

Junko Higasa

『虞美人草』の女学三景は女のタイプを紐解く学問である。「過去形：小夜子」「現在形：藤尾」「未来形：糸子」そして「動く」を変則活用させると「動けない小夜子」「動かない藤尾」「動ける糸子」となる。更にそこから愛の三パターンが浮かび上がる。

まず第十二章で『父の好意は再び水泡に帰した』父の好意の一度目は、小夜子を小野と結婚させるために東京へ出てきたこと。そして二度目は生活用品を小野と一緒に勧工場へ買いに行かせようとしたこと。父は二人の将来の生活のために気を遣った。だが小夜子は、東京で住まう家（結婚すれば二人が住む家）を小野が訪ねてきた時、「一日暇を取ってもらって博覧会に一緒に行こう」という父の配慮を、実現するための依頼を口に出すことができなかった。それどころか京都へ帰りたくなった。そして今度は小野の生活を目にしてそれに見合う買い物を、という配慮で下宿を訪ねさせたものの「一緒に買い物に行ってほしい」という要望を、未来の夫にうまく伝えることが出来なかった。小夜子は自分の意思で「動けない女」である。同時に小野以外どこへも「動けない女」である。「愛されたいが愛されない」時代遅れの女である。そんな過去の女を小野は見事にかわす。『小夜子は悄然として帰る』小野は外へ出る。『同時に逝く春の舞台は廻る』そして過去の女を 180 度転換した現代の女が表舞台へ登場する。

さて、浅葱桜も散って一変した舞台の上で辛夷の花も朽ちかかる頃、その花の赤紫の実のような藤尾は『干す髪の帯を隠して、動かせば背に陽炎が立つ。黒きを外に、風が嬲り、日が嬲り、つい今しがたは黄な蝶がひらひらと嬲りに来た。知らぬ顔の藤尾は、内側を向いている』一見何気ない光景のようであるが、ここには藤尾の性格が表れている。黒髪は女の命。長い髪は美しい女の象徴。その藤尾の美しさをあらゆるものが嬲りに来ても藤尾は知らぬ顔である。何に嬲られようとも彼女の視線の向く先は自分の内側だけである。『濃く引き残したる眉の尾のみが慥かである。眉の下なる切長（きれなが）の黒い目は何を語るか分らない』強い意思だけが確かであり、その目から男は何も読み取ることが出来ない。藤尾は動かそうとしても「動かない女」である。婿を取って甲野家から「動かない」女である。「愛されたいが愛さない」今時流行の女である。

さて過去、現在の次には未来がある。糸子は兄に狐の袖無（ちゃんちゃん）を縫ったお礼として「花見と博覧会―どっちが好い」と尋ねられて『わたし、博覧会が見たいわ』（第十章）と二者択一できる。甲野さんに『藤尾がそんなに羨ましいんですか』と尋ねられて『ええ、本当に羨ましいわ』（第十三章）と素直に認められる。欽吾に『嫁に行くと変わります』『それで結構だ。嫁に行くのは勿体ない』（第十三章）と言われて『私は御嫁には行きません』（第十六章）と諦められる。更に『御叔母（おば）さん。欽吾さんは出たいのですから、素直に出して御上げなすったら好いでしょう。無理に引っ張っても何にもならないと思います』（第十八章）と本人の意思を尊重できる。糸子は相手が誰であろうと自分の意思で「動ける女」である。甲野さんの気持ち一つで、どこへでも「動ける女」である。「愛されたいし、愛したい」男女同権未来形の均衡のとれた女である。

漱石は糸子型が未来に増えるように願ったが、どうやら女の愛は藤尾からたいして進歩していないらしい。何故ならそれは「脆き者、汝の名は女」だから。(2013.11.18)